

赤い落下傘

あか

らっ

か

さん

菅生 浩 作 鈴木たくま 絵



NDC 913 8093-02152-7159

176ページ 21cm

赤い落下傘(らっかさん)

昭和52年12月6日

第1刷

著者 菅生 浩

発行者 大邊 豊

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 075(681)4431<代表>

印刷所 東洋印刷株式会社

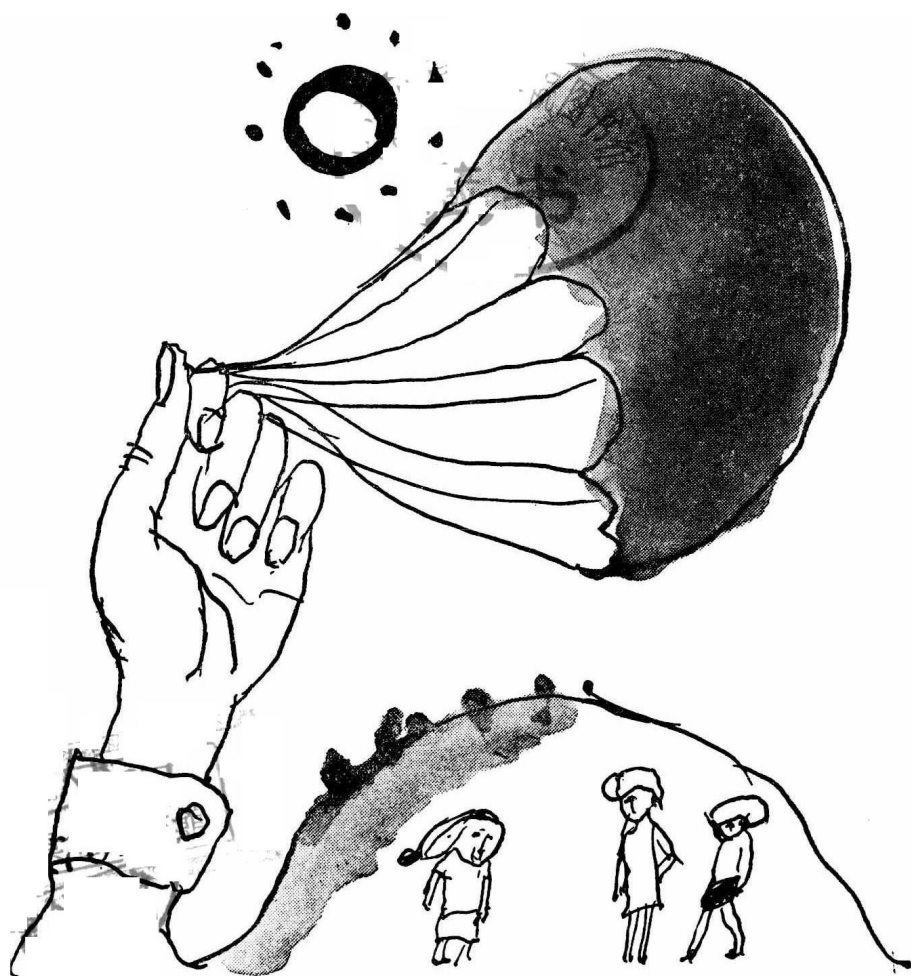
©1977 Hiroshi Sugo. Printed in Japan

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。

(定価はカバーに表示してあります)

赤い落下傘

あか らっ か さ ん



日本財団支援

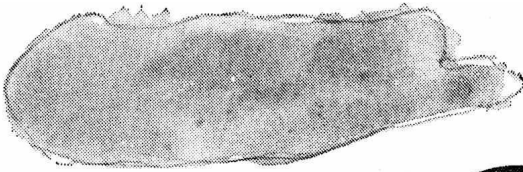
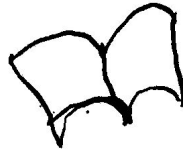
笹川良一記念文庫

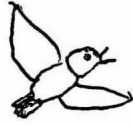
財団法人日本科学協会

装
幀
デ
ザ
イ
ン

上
田
晃
郷

も
く
じ





〆一〆 くやしい日曜日 8

〆二〆 はじめてのひとりたび 25

〆三〆 泉いづみのほとりで 42

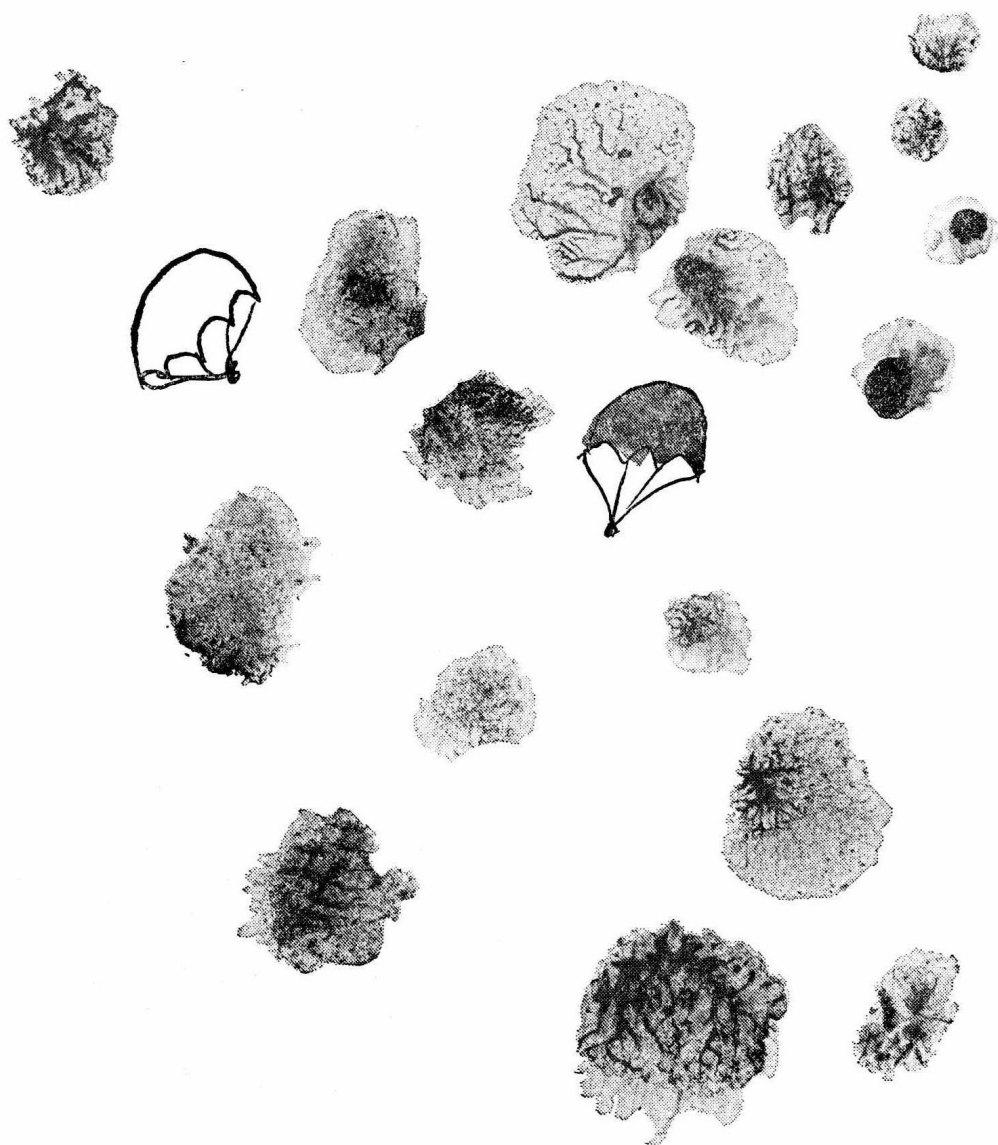
〆四〆 ほのかなぬくもり 61

〆五〆 夢のなかのアカンベエ 86

〆六〆 おわびの手紙 104

〆七〆 わたしはかえらない 123

〆八〆 はげしく落らっか下傘さんをふれ！



著者・菅生 浩(すごう・ひろし)

1938年、福島県郡山市生まれ。安積高校を卒業後、上京。60年、『婦人生活』の懸賞小説に『束の間のものに』が入選。75年に『巣立つ日まで』で第8回日本児童文学者協会新人賞受賞。著書は他に『あかい巣ばこ』がある。
現住所 〒192 八王子市長沼町999-14

画家・鈴木たくま(すずき)

1918年、横浜に生まれ東京で育つ。児童出版美術家連盟所属。主な作品として『おぼけ煙突の歌』『竜宮へいったトミばあやん』『ひとりひとりの戦争』『ドンが見た風の鳥』『はりせんぼんクラブ』『踊り子マヌ』ほか多数。
現住所 〒359 所沢市西新井町5-13

あか
らっ
か
さん
赤い落下傘



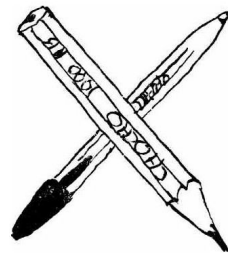
へーく やしい日曜日

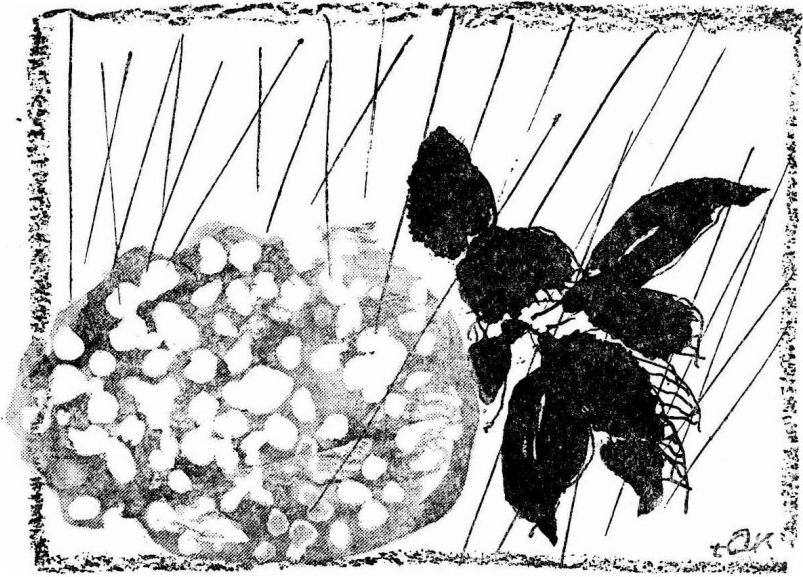
悲しい日曜日になりそうだった。

父と母のけんかは、しだいにはげしくなってきた。二人のいいあう声は高くなり、小雨こさめのふる朝の静けさをふるわせ、由佳ゆかのへやまではっきり聞こえてくるようになった。

由佳は机つくえにほおづえをつき、となりの家の庭のしおれたアジサイを、横目でみていた。色あせた花びらは、紙くずのようだ。

父と母のけんかの原因は、一人娘ひとりむすめの由佳だった。由佳を夏休みにどこですご





させるか、という相談がなかなかまとまらず、いいあいになったのだ。そのあらそいは、由佳が二年生だったおとしから、夏休みが近づくと、きまっておこり、ことしで三どめになる。

「……あんたは、このごろ平気で約束やぶるようになったわ。」

「おれだって、好きで約束やぶるわけじゃないんだよ。約束をぜんぶ守ることができたら、神様になれるよ。」

「神様になってほしくないけど、うそつきにもなってほしくないわ。」

「うそつきとは、なんだっ。」

「約束をやぶれば、うそつきよ。ことしの夏休みも、由佳は横浜にあずけるってきめてから、まだ一週間もたってないわ。」

由佳はきょねんとおとしの夏休みのほとんどを、横浜の母の実家ですごしている。

「なんにも由佳を深山に夏休み中おいておくわけではないんだ。四日でも五日でもいいから、こっちでつごうのよいときによこしてくれていってらんだ。」

深山とは、父の実家のある福島県の町だ。

「そんなことだめよ。由佳の夏休みの予定は、きのうの夜、横浜のほうとそうだんして、きちんときめてしまったわ。」

「きちんときめたなんていったって、どうせまた、鎌倉や箱根にいたり、水泳教室や書道塾にかよったりなんだろう。」

「こんどはちがうのよ。海や山にはちょっといくだけで、家庭教師をつけて勉強させたり、熱海で特訓合宿させることになったのよ。」

「え？……由佳に家庭教師をつけるのか……それに、特訓合宿させるって……」

由佳はまだ四年生なんだぞ。特訓合宿ってなんだ？」

「四年になったから、苦手な算数を勉強させるために、横浜の大きな学習塾が熱海のホテルでおこなう特別訓練講座に、十五日ほど参加させることにしたんです。」

「へー、小学四年生にそんなことをさせる塾があるのか。おどろいたなあ……」
父はこうふんのさめた声でいった。

由佳もおどろいた。家庭教師も特訓合宿も初耳なのだ。悲しいというより、おそろしい日曜日になりそうだ。由佳はアジサイから目をそらし、頭をかかえ、いっそう耳をすました。

由佳は夏休みを、横浜の母の実家ですごすのを楽しみにしていた。母は兄と姉が一人ずつおり、兄が横浜の中華料理店のあとをつぎ、姉は鎌倉の洋品店に嫁入りしている。子どもは、兄が四人、姉が三人いるが、すべて男だった。

だから、横浜よこはまの祖父そふと祖母そぼは、ただ一人の女の孫まこの由佳ゆかを、とてもかわいが
る。ときには、母にたしなめられるほど、二人は由佳を甘あまやかす。今年の正月
にいったときは、お年玉を五千円ずつくれた。由佳にとって、そんな母の実家
は、一日も早くいきたい楽園だ。

ところが、こんどの横浜いきは、ゆううつなことになるそうだ。ホテルに十
五日もとじこめて、大きらいな算数を勉強べんきょうさせるという。それから、家庭教師
もつけるというのだ。由佳が四月からかよっている、八王子南小学校の六年生
のなん人かが、夏休みに学習塾がくしゅうじゅくの合宿がっしゅくに参加するうわさを、由佳も聞いてい
た。

そのうわさを耳にしたとき、夏休みの宿題さえもてあます由佳は感心した。
そして、成績せいせきがよくて勉強べんきょう好きな六年生がいくのだろう、とぼんやりかんが
えた。また、金持ちの子どもがすることだろう、ともかんがえた。定職ていしよくのな
い父と病気がちな母と、古ぼけた小さな借家しゃくやに住む由佳には、別世界のこと

のようだった。

でも、両親のいいあいは、由佳ゆかがいつのまにか、その別世界に近づいているのをしめしていた。

「……熱海あたみの合宿がっしゅくには、信彦のぶひこちゃんもいきますから、つきそいは、わたしと姉さんがこうたいでします。」

信彦は由佳とおなじ四年生で、母の姉の末っ子だ。

「へー、つきそいもいくのかあ……でも、成績せいせきのよい信彦くんまで、いくひつようがあるのかなあ……。」

父はまだおどろきからさめないらしく、力のない声でいった。

「できる子とできない子を、わけて教えることになってんのよ……とにかく由佳は夏休みがはじまったら、すぐ横浜よこはまにいった家庭教師かていきょうしについて勉強し、八月三日から十八日まで、熱海のホテルで合宿し、それから横浜にもどってきて……。」

「まてまて……家庭教師って、どこのだれなんだ？」

父の声は、またとげとげしくなってきた。

「兄さんのお友だちの娘さんで、横浜の大学の四年生よ。卒業したら学校の先生になるんですって……ほら、あんたもなんどかあったことがある、啓信堂のご主人のお嬢さんよ。みかけはやさしそうなお嬢さんだけど、勝気ではきはきしているから、由佳がいくらわがままでも、びしびしやってくれるわよ。」

啓信堂とは、本屋のことだ。その娘に、由佳はきょねんの夏休みのおわりごろ、宿題を教えてもらったことがある。丸顔の美人でやさしそくにみえたが、教えかたはきびしかった。

「夏休みを、横浜と深山のどっちですごさせるか、なんていうことより、四年生の由佳を学習塾のホテルの合宿にやったり、家庭教師をつけたりすることが、いいか悪いかを、よくはなしあうべきだとおもうよ。」

「いいも悪いもないわよ。ここのご近所にも、二年生や三年生で学習塾がよいしているお子さんがいるわ。信彦ちゃんだって、四月から国語と算数の塾に

